

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	林 史	全日制課程	本校
----	------------	-----	----------------	------	-----	-------	----

1 ミッション(地域社会における自校の使命)

学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となる

2 ビジョン(使命の追求を通じて実現しようとする自校の将来像)

- 社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーを育成する学校
- 「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校

3 バリュー

「グローバルな視野」と「地域に根ざした心」の双方を大切にし、主体的に学び続ける「ラーニングコミュニティ」を形成する

4 重点的に育成する力と目指す生徒像

- ① 様々な場面で活用できる深い知識・技能を有する生徒
- ② 新しい価値を生み出す創造的・批判的な思考力を有する生徒
- ③ 異なる文化・価値観を持つ人々と協働できる生徒
- ④ 目標に向かってやり抜く力を有する生徒
- ⑤ 日本語でも英語でも議論・協働できる高い語学力を有する生徒

5 環境分析

<学校の立地及び地域の状況>

本校は瀬戸内海に浮かぶ大崎上島の西側に位置する大串地区に立地し、今年度4月に開校初年度を迎えた併設型中高一貫教育校である。学校は、国立公園に指定されている神峰山をはじめとする山々や多くの島々が点在する瀬戸内海など風光明媚な大自然に囲まれ、様々な伝統行事が脈々と伝承されているなど、これらを生かした探究活動等を通じた多様な教育プログラムを可能とする環境が整っている。

また、本校が所在する大崎上島町は、平成27年10月31日に、大崎上島町まち・ひと・しごと総合戦略において、「多様な人材を育てる教育の島づくり」を進めることを重点施策とする「教育の島」構想を立ち上げるなど、島内における教育熱は非常に高い地域である。平成30年3月には、認定こども園を含め島内に所在する学校関係の代表及び教育行政機関等の代表で組織される「大崎上島町教育の島創造協議会」が立ち上げられ、世代や枠組みを超えた交流、さらには、海外を含めた島外の教育機関との積極的な連携・交流を通じて、島内の活発な人材交流・育成、ひいては誰もが生き生きと暮らせる地域の実現を目指した「教育の島交流基本構想」策定に向けた協議が幾度となく重ねられている。

教育行政機関をはじめとして商工会議所や大串地区の住民などからの本校に対する期待は極めて高く、強力な支援が期待できるなど、本校教育の推進にあたっての支援体制が十分整っている地域といえる。実際、島内には幼稚園3園、小学校3校、中学校1校、県立高等学校1校、県立特別支援学校分教室1室、国立高等専門学校1校が所在し、それぞれの学校が特色を持たせて教育活動を展開するとともに、これらの学校及び教育行政機関、地域が協働して、島で学ぶ幼児・児童・生徒の主体的かつ深い学びを進める「大崎上島学」の取組が成果を上げている。本校がそれらの学校の取組と足並みを揃えることで、本校の教育活動の質的向上が期待できる。

大崎上島は、全国から定住を目的としたIターン、Uターンが活発な島といえる。しかし一方で、少子高齢化や島外への人口流出などから過疎化の進行がみられるのも事実である。このような状況の中で、本校においては、他校にはない独自の特色ある教育活動を堅持するとともに、地域の教育力を活用した地域に根ざした取組を展開することで、地域の活性化及び国内外への情報発信の役割を果たしていけるよう、継続的なカリキュラム開発を行っていく必要がある。

<生徒募集>

昨年度の11月及び12月に実施した入学者選抜では中学1年生のみを募集し、今年度の入学予定者40名を選抜した。第1次選抜では県内外を含め375名の出願者のうち372名が受検するなど、児童及び保護者からの本校に対する期待は大きい。

今後も入学者選抜においては中学1年40名のみを募集し、6年間をかけて段階的に高等学校3学年までの生徒を在籍させることとなる。さらに今後、外国人留学生等を受け入れ、生徒が異なる文化や価値観を共有しながら協働して学ぶなど、多様性あふれる学習環境づくりを進めていく予定である。

6 本校の位置付け及び本校が進める独自の教育活動

本校は、「学びの変革」を先導的に実践し、その目指すところである「日本・世界のモデルとなる新たな中等教育の姿を創造し、グローバルに活躍できるリーダーを育成する学校」として設置された経緯がある。特色ある教育活動の展開を通じてミッション・ビジョンの実現に全力を挙げて取り組むとともに、新たな教育モデルを構築して県全体への発信、本県の教育力向上に寄与することが期待される学校である。この置かれた位置を鑑み、その有効な手立てとして、特色ある教育活動の例として、本校ではつぎのような取組を展開する。

① IB（国際バカロレア）の教育プログラムの導入予定

IB（国際バカロレア）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的とした国際的な教育プログラムである。ミドルイヤーズ・プログラム（MYP）が11歳から16歳、ディプロマ・プログラム（DP）が16歳から19歳の者を対象としており、本校では、中学1年生からMYPを導入、高校1年12月からDPを導入・実施することを計画している。なお、現在本校はMYPの候補校である。

導入に際しては、申請から認定までに、関心校、候補校、認定校の段階があり、各段階には明確に区別された申請項目とタイムラインがある。どのプログラムにおいても、IB認定校を目指すすべての学校はこの各段階を経る必要があり、IBが認定の可否に関する裁量を有している。本校では、MYP及びDPともに2021年度に認定されるよう準備を進めている。

② 主体的・経験的に探究的な学び

各教科と実社会を関連付けて社会の課題を発見し、プロジェクト型学習を通して解決する素地を養う。全ての教育活動を通じて、学習に必要なスキルや、自己の人生をより良く切り開いていくためのスキルを身に付けることを目標としている。そのためには、実体験を大切にして生徒自身が意思決定する場面を設定するとともに、失敗から学ぶことを大切にするなど、常に挑戦することができる学習環境づくりを目指す。

③ 言語学習

母語以外の言語を学ぶことで、新たな文化や価値観を学ぶことができ、そのことから自国の文化や習慣を振り返って、自国をより深く理解することに繋げることが可能となる。また、将来的には、生徒が母語と第2言語の両方で自分の考えや思いを表現し、議論できる力の育成を進める。

④ 評価

生徒が見通しをもって学習に臨むために、事前に単元案について生徒と共有するとともに、課題を出す際にはルーブリックを提示して、生徒が常に自身の到達度を意識しながら学習を進めることができるよう授業設計を行う。各教科においては、各単元の終わりに実施する総括的課題によって評価する。また、この評価に至るまでに形成的評価を繰り返し実施し、教員は生徒の学びと教授方法に乖離がないかを確認し、授業改善に繋げたり、生徒の個の学びの到達度に合わせて支援を行うことを大切にする。

⑤ 国際協働型プロジェクト学習

社会の様々な課題に対して、それを自分達の課題として捉え、仲間と協働して解決に至るプロセスを重視する課題発見・解決型学習を本校の教育活動の核として位置づけて取り組む。科目「未来創造科」（総合的な学習の時間）を中心として、地域の教育力やICT機器等を活用して、身近な問題から世界的な問題までの幅広い課題に対して学習を行い、より良い社会を創造するために将来、様々なフィールドで活躍する上で必要となる力を身に付けていく。

⑥ 自律性・多様性を養う全寮制による教育

本校は全寮制の学校である。生徒は親元を離れた6年間の寮生活により、学校における教育活動とともに寮における様々な活動とおして、他者と協働する力や課題を解決する力を育成する。将来的には、多国籍、異年齢の仲間との共同生活を行うことになるが、このような生活環境を通して異なる文化や価値観をもつ者との協働及びグローバルマインドの育成を進める。

7 目標の設定

学校経営目標						
達成目標	評価指標	実績	目標値			担当部
		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	
1 社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーを育成する学校						
生徒が自己や集団の課題を自ら発見・解決し、集団としてより良い方向に進もうとする姿勢やリーダー性を身につけている。	生徒アンケート調査 （「自分は学年の課題を解決するために積極的に行動している」）の肯定的回答の割合	—	80%	82%	85%	学年
グローバル社会の諸課題に対応できる資質を育成するために、地域の課題や世界的な問題の発見・解決に取り組み、それをバイリンガルで発信することができる。	グローバル社会の諸課題に対する解決策の提案数	—	8提案 （全グループ）	16提案 （全グループ）	24提案 （全グループ）	教務
一人一人の生徒が自己実現に向けたプロセスを理解している。	生徒アンケート調査 （進路に対する見方・考え方の向上）における肯定的回答の割合	—	80%	85%	90%	進路指導
生徒が、自分の考えや思いを英語で表現・議論できる高い英語運用能力を有している。	ケンブリッジ英語検定試験における到達レベル	—	9割以上の生徒がCEFR A1以上のレベルに到達	○中1生の生徒がCEFR A1以上のレベルに到達 ○中2生の生徒がCEFR A2以上のレベルに到達	○中1生の生徒がCEFR A1以上のレベルに到達 ○中2生の生徒がCEFR A2以上のレベルに到達 ○中3生の生徒がCEFR B1以上のレベルに到達	進路指導
2 「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校						
生徒が自己の目標を明確にして、粘り強く主体的に学習に取り組もうとしている。	学習状況振り返り調査結果（5段階評価、自己評価）	—	平均値 3.5以上	平均値 3.7以上	平均値 4.0以上	教務
全ての教科において概念理解を深める質の高い授業が展開されている。	授業評価アンケートの肯定的回答の割合	—	80%	82%	85%	教務
地域等に関わった学校を目指し、ローカル・グローバルの両視点から教育活動が展開されている。	学校運営協議会委員のアンケート結果における肯定的回答の割合	—	70%	80%	90%	教務管理職
3 生徒の自己管理能力を高めるとともに、安心・安全な学習及び生活のための環境を整えた学校						
所属する学級が全ての生徒にとって居心地の良い場となっている。	Hyper - QU における学級生活満足群に位置する生徒数の割合	—	80%	82%	85%	学年
様々な場面で活用できる深い知識を身に付けるための学習習慣が確立している。	目標学習時間の達成率	—	80%	85%	90%	進路指導 学年
生徒自らが学校及び寮生活におけるルールを考え、それを率先して厳守し、主体的に規律ある生活を送っている。	生徒アンケート調査、Hyper - QU テストの肯定的回答の割合	—	80%	82%	85%	生徒支援
生徒の食の意識を高めるため、地域の食材を取り入れた食事が定期的に提供されている。	地場産物の活用状況	—	月1回	月2回	月3回	保健

4 教職員が自己のワークライフバランスを意識し働き方を見直すことで、生徒に対する質の高い教育活動を提供し続ける学校

教職員自らが適切な時間管理を行うことで、教職員個々の時間外における勤務が縮減している。	一月当たりの時間外勤務時間が40時間以下の教職員の割合	—	60%	70%	80%	管理職
効率的な業務遂行により、教職員の年休取得が推進されている。	年間の年休取得日数が10日以上以上の教職員の割合	—	60%	70%	80%	管理職
教職員が、生徒と向き合う時間が十分確保できている。	業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	—	80%	85%	90%	管理職

8 行動計画

学校経営目標			
達成目標	本年度行動計画	中期行動計画	担当部等
1 社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーを育成する学校			
生徒が自己や集団の課題を自ら発見・解決し、集団としてより良い方向に進もうとする姿勢やリーダー性を身につけている。	学年班長会を組織し、適宜フィードバックを行いながらリーダー性を育むための生徒支援を行う。	学年班長会を継続するとともに、生徒主体による班長会運営について支援する。	学年
グローバル社会の諸課題に対応できる資質を育成するために、地域の課題や世界的な問題の発見・解決に取り組む、それをバイリンガルで発信することができる。	地域との交流やフィールドワークの機会を設定し、生徒が相互に協働しながら課題解決へと行動していくプロジェクト学習のカリキュラムを設計・実施する。さらに、その学習成果をバイリンガルで発表する場を設定し成果を共有する。	遠隔地に住む人々や有識者との Skype Meeting 等を通してグローバル社会における課題を共有し、その課題を解決するための方策等を考えるプロジェクト学習のカリキュラムを設計する。さらにその学習成果をバイリンガルで発表する場を設ける。	教務
一人一人の生徒が自己実現に向けたプロセスを理解している。	将来設計のためのワークショップ等を継続するとともに、未来創造科と連携を図りながら Personal Project に向けた準備を行う。	将来設計のためのワークショップ等を計画し、自己実現に向けた取組を推進する。	進路指導
生徒が、自分の考えや思いを英語で表現・議論できる高い英語運用能力を有している。	授業及び放課後活動等を計画的に実施するとともに、生徒の英語運用能力の定着状況についてこまめに把握する。	生徒の状況を把握し、個々の段階により一層合ったものを提供できるよう、プログラムを改善・開発する。	進路指導
2 「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校			
生徒が自己の目標を明確にして、粘り強く主体的に学習に取り組もうとしている。	育成したい学習者像について、教員及び生徒間でその具体的な姿を共有する。日々の学習活動のなかで生徒がその学習者像を自らの学びの姿勢として体現できる場面を設定するとともに、教員がその達成に向けて学習指導方法の工夫及び支援を行う。	生徒が「育成したい学習者像」について、自分自身の具体的な学習場面を取り上げながら語るができるようにするとともに、ラーニングコミュニティの一員としての自覚を持つことができる学習活動を展開する。	教務
全ての教科において概念理解を深める質の高い授業が展開されている。	全ての教科が、概念理解を深めるための探究的な学習活動を展開する。	全ての教科が全単元において概念理解を深める探究的な学習活動を計画・実施し、次年度に向けた改善を行うなど、PDCA サイクルに基づいた授業改善を継続的に行う。	教務
地域等に関わった学校を目指し、ローカル・グローバルの両視点から教育活動が展開されている。	日常的に地域の人々と連携・協働してプロジェクト型学習に取り組むことができる学習プログラムを設計・実施する。	プロジェクト学習において、グローバルな課題と地域の課題を結びつけて探究するとともに、学習成果発表会等の場における有識者からのフィードバックを生かした教育活動を展開する。	教務 管理職
3 生徒の自己管理能力を高めるとともに、安心・安全な学習及び生活のための環境を整えた学校			

所属する学級が全ての生徒にとって居心地の良い場となっている。	定期的な個別面談を行うなどで学級や生徒に係る情報の収集に努めるとともに、学級において適宜取り上げながら学級経営を行う。	面談等を継続して行うとともに、生徒支援部との連携を図り、寮生活を含め生徒に係る包括的な情報を収集することで学級経営に生かす。	学年
様々な場面で活用できる深い知識を身に付けるための学習習慣が確立している。	各教科の学習課題量を調節し、生徒の学習意欲の維持・向上を図りながら、個々にとって最適な学習習慣を確立させる。	分掌、教科、学年と連携を図り、進路ガイダンス等において学習習慣の確立に向けた指導を行う。	進路指導 学年
生徒自らが学校及び寮生活におけるルールを考え、それを率先して厳守し、主体的に規律ある生活を送っている。	集団生活において守るべきルールや与えられた役割を、自発的にかつ責任をもって実践することができるよう、ユニットタイムを活用して振り返りを実施する。さらに、主体的に考えて行動するための効果的なユニット運営の在り方を構築する。	ユニットリーダーを中心として、必要な役割を考えさせるとともに、その役割が日々の集団生活の中で有効に機能しているかについて、ユニットタイム等を活用して振り返るとともに確実な実行に向けての支援を行う。	生徒支援
生徒の食の意識を高めるため、地域の食材を取り入れた食事が定期的に提供されている。	地場産物の仕入れ業者を開拓し、生徒に地域の食材を使った食事やその情報を提供する。	大崎上島町教育委員会などとの連携を図りながら、地域の名産や出荷内容を把握し、仕入れ業者を開拓する。	保健
4 教職員がワークライフバランスを意識し自らの働き方を見直すことで、生徒に対する質の高い教育活動を提供し続ける学校			
教職員自らが適切な時間管理を行うことで、教職員個々の時間外における勤務が縮減している。	校務運営会議及び職員会議等を活用し、働き方に係る指導・助言を行うことで、組織的な業務遂行及びタイムマネジメントの必要性についての意識の向上に努める。また、細かな声掛けにより定時退校の確実な実施を進める。	一層の時間外勤務の縮減を進めることを通して、仕事と家庭の両立に係る意識の醸成を図るとともに、時間外の時間の有効活用の方法や自己の健康的な生活の確保に係る意識の高揚を図る。	管理職
効率的な業務遂行により、教職員の年休取得が推進されている。	様々な機会を捉え年休取得を推進し、働きやすい職場環境づくりを進める。	教職員個々の事情に応じた働き方に柔軟に対応できる職場とするため、業務改善を一層進め、業務の精選を進める。	管理職
教職員が、生徒と向き合う時間が十分確保できている。	学校における業務改善を進め、生徒と向き合う時間及び自己研鑽に係る時間の確保に努める。	学びの深化を推進するための授業準備等に係る時間の確保のため、業務改善により生じた時間が有効に活用されている状況をつくる。	管理職